

# 公開実用平成 2—122844

⑩ 日本国特許庁(JP)

⑪ 実用新案出願公開

⑫ 公開実用新案公報(U) 平2—122844

⑬ Int. Cl.<sup>5</sup>

E 04 G 21/30  
E 05 B 1/00

識別記号

3 1 1 B  
N

庁内整理番号

6539—2E  
7521—2E

⑭ 公開 平成2年(1990)10月9日

審査請求 有 請求項の数 1 (全 頁)

⑮ 考案の名称 把手の養生カバー

⑯ 実 願 平1—27251

⑰ 出 願 平1(1989)3月13日

⑱ 考 案 者 前 田 靖 雄 北海道札幌市中央区北三条東2丁目2番 戸田建設株式会社  
札幌支店内

⑲ 考 案 者 田 野 茂 北海道札幌市中央区北三条東2丁目2番 戸田建設株式会  
社札幌支店内

⑳ 出 願 人 戸田建設株式会社 東京都中央区京橋1丁目7番1号

㉑ 代 理 人 弁理士 佐々木 功



## 明 細 書

### 1. 考案の名称

把手の養生カバー

### 2. 実用新案登録請求の範囲

伸縮自在な弾性体で形成するものであって、内部を中空にしてその一端を外に開口した円筒形状で把手の操作部を冠着するカバー本体と、前記把手の軸部を冠着するカバー係着体とからなり、該カバー係着体を上下2分割するとともにその分割面に前記軸部を冠着する際にこのカバー係着体を係止する係合部を形成し、前記カバー本体の端部をカバー係着体で挟持するようにしたことを特徴としてなる把手の養生カバー。

### 3. 考案の詳細な説明

(産業上の利用分野)

本考案は、建築物である特にマンションやアパートの建築の際に使用されるもので、ドアの把手の損傷を防止する養生カバーに関する。

(従来 of 技術)

一般に、マンションやアパートを建築した場合



に、建物の内装を施す段階においては、ドアの取付けが済み把手が備えられた後も内装工事が行なわれている。従って、内装工事を進める上で、前記ドアからの出入りが続き、出入りする人や物との接触により前記ドアの把手がキズ付き、把手の交換が必要となり不測の損害をもたらすことになる。

この把手の損傷を防止するために、ドアを装着後、このドアの把手をウェスなどで被包し更に接着テープでテーピングする作業を作業者が行なっていた。

（考案が解決しようとする課題）

ところで、上述した従来の把手の損傷防止のために、把手に布等を巻き付けテーピングするやり方では、作業時間がかかり作業能率が悪くなり、また、建物の見学者が来た場合にも、見栄えのしないものであった。更に、建物の完成時には、再度手間をかけて取外しをしなければならないといった欠点が存在した。

本考案の目的は、上述した欠点に鑑みなされた



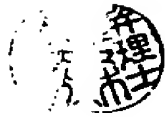
もので、マンションなど建物のドアの把手をキズ付きなどの損傷から防ぐことのできる、また、見栄えのする把手の養生カバーを提供することにある。

（課題を解決するための手段）

本考案に係る上記課題を解決し、目的を達成するための要旨は伸縮自在な弾性体で形成するものであって、内部を中空にしてその一端を外に開口した円筒形状で把手の操作部を冠着するカバー本体と、前記把手の軸部を冠着するカバー係着体とからなり、該カバー係着体を上下2分割するとともにその分割面に前記軸部を冠着する際にこのカバー係着体を係止する係合部を形成し、前記カバー本体の端部をカバー係着体で挟持するようにしたことに存する。

（作用）

このように、本考案に係る把手の養生カバーによれば、ドアの把手の操作部に前記カバー本体を挿入して冠着させ、更に把手の軸部に2分割されたカバー係着体を前記係合部で係合させて冠着さ



せることにより、ドアの把手を養生することとなる。

(実施例)

以下、添付図面に従って本考案の一実施例を説明する。第1図は、本考案の養生カバー1の斜視図である。第2図(イ)、(ロ)、(ハ)は該養生カバー1のカバー本体2の正面図、カバー係着体3、4の斜視図である。

この養生カバー1を説明すると、カバー本体2とカバー係着体3、4とで構成されるものである。カバー本体2は、全体が略細長い円筒状に形成され、その内部5が中空でかつその一端を外に開口して形成されている。カバー係着体3、4は、内部が環状中空にされるとともに、これを軸芯方向の両端に開口させた円筒状体を軸芯方向に2分割して形成される。更に、前記2分割した面3a、4aには、該カバー係着体3、4の係合用の係合部6が設けられ、この係合部6は、突起部7と凹部8とからなるものである。このカバー係着体3、4の前部3b、4bは、カバー本体2の



前部 2 b を被包し挟持するように形成されている。

この養生カバー 1 をゴム、スポンジなどの高伸縮性ある弾性体で形成すればよく、特に限定するものではない。また、第 5 図に示すように、前記カバー係着体 3, 4 をその胴部などを連結部 9 で連結させ、一体に形成するのも好ましいものである。

この様に形成された養生カバー 1 を使用するには、ドア 10 の把手 11 の操作部 11 a にその先端からカバー本体 2 を開口部 2 a より挿入し冠着する。続いて、カバー係着体 3, 4 を前記把手 11 の軸部 11 b に冠着させる。このとき、前記係合部 6 の突起部 7 と凹部 8 を係合させて、カバー係着体 3, 4 を係止する。

この様にして、把手 11 を養生しキズなどの損傷を防止するものである。

また、ドアの把手には数種類の形状があるが、本考案の養生カバー 1 は高弾性体で形成されるので、適宜対応できるものであり、従来のように、



テーピングなどを必要としないものである。更に、場合によっては、カバー本体のみ、カバー係着体のみを使用するようにしてもよいものである。しかも、この養生カバー 1 を輸送するときは、第 1 図に示すように、カバー係着体でカバー本体の端部を挟持して組立てて送ることができるので、輸送上も取扱いやすいものである。

( 考案の効果 )

以上詳細に説明したように、本考案に係る養生カバーによれば、ドアの把手を養生するに、高弾性体で把手の操作部を冠着するカバー本体と、これと別体の把手軸部を冠着するカバー係着体とからなる養生カバーとしたので、従来に較べ装着若しくは取り外し作業に要する時間が短縮されて作業能率が向上し、また、養生カバーを輸送するのにも取扱いやすく、更に外観上も見栄えのするものである。

4 . 図面の簡単な説明

第 1 図は、本考案の養生カバーの斜視図、第 2 図は、同じく分解図、第 3 図は、同じく使用状態



を示す説明図、第4図は、カバー係着体の断面図、第5図は、他の実施例を示すカバー係着体の正面図である。

1…養生カバー、2…カバー本体、  
3、4…カバー係着体、5…中空、  
6…係合部、7…突起部、8…凹部、  
9…連結部、10…ドア、11…把手、  
11a…操作部、11b…軸部。

実用新案登録出願人

戸田建設株式会社

代理人 弁理士

佐々木

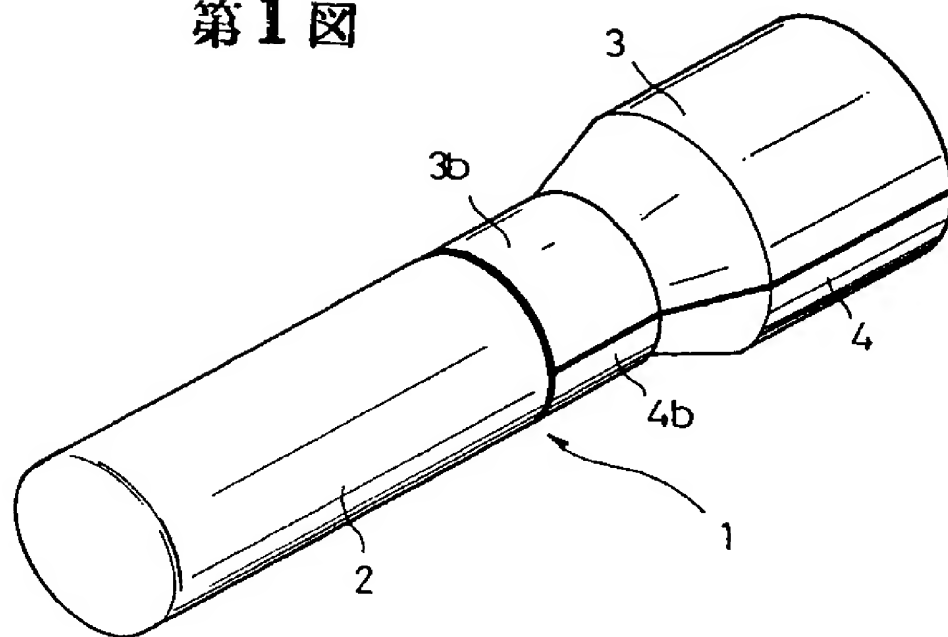
功



536

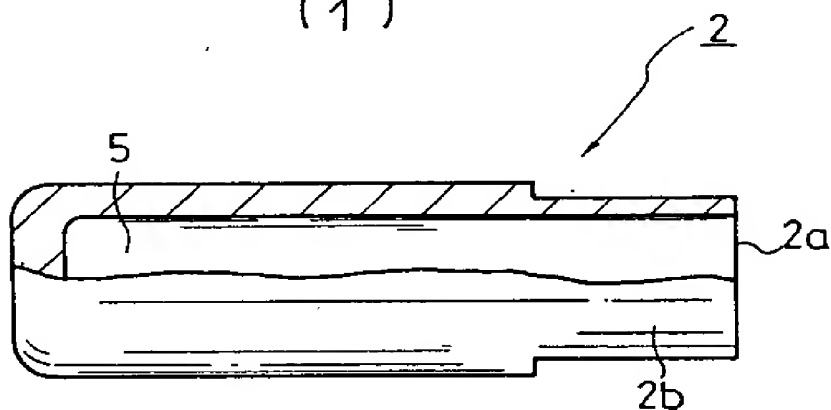


第1図



第2図

(1)



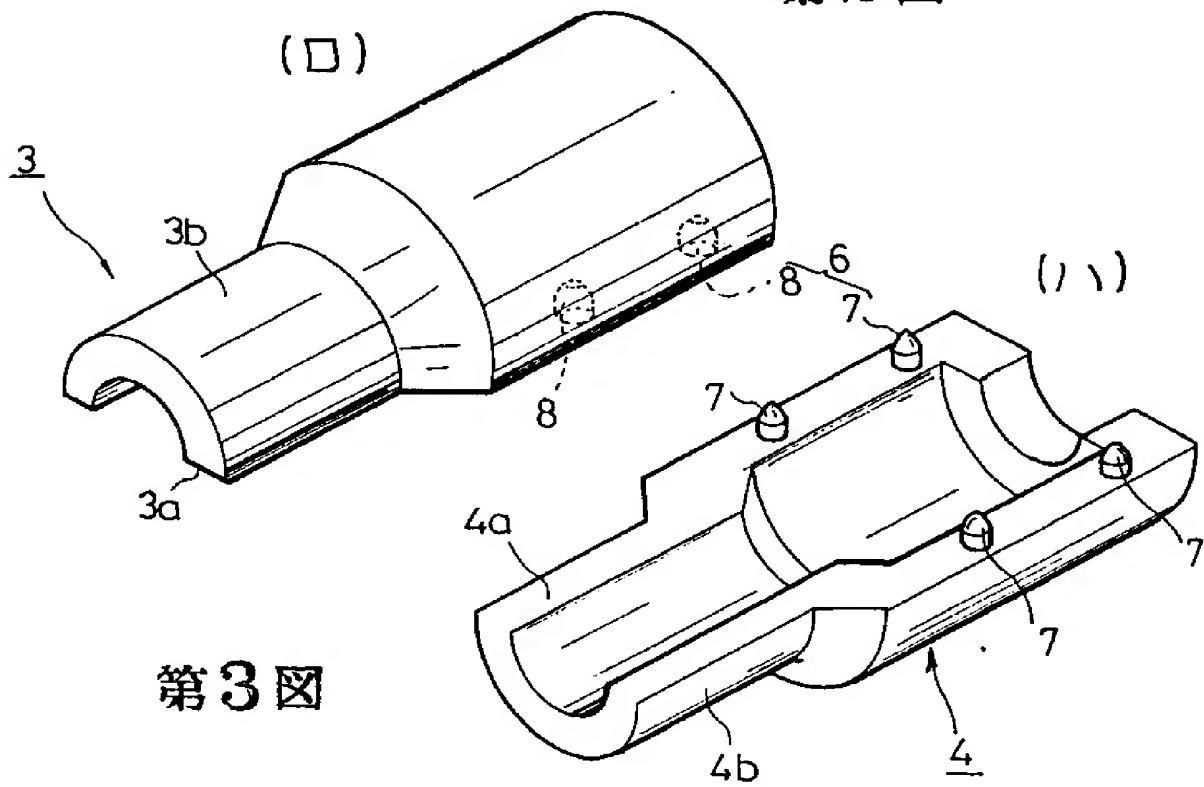
537

実用新案登録出願人 戸田建設株式会社

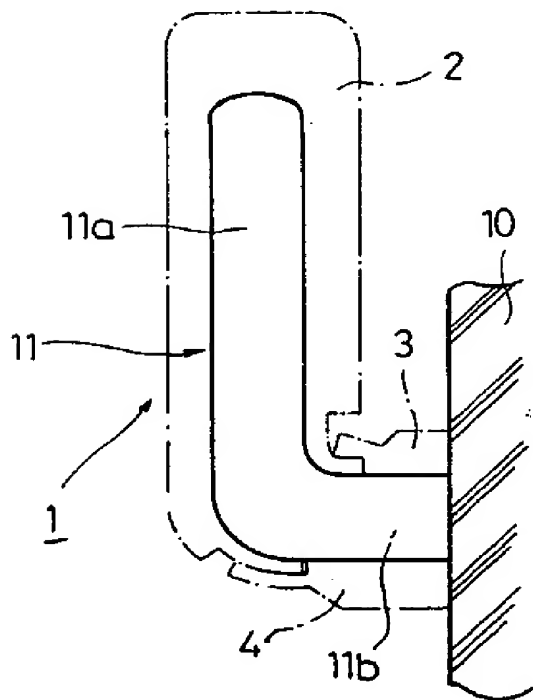
代理人 弁理士 佐々木 功

実開2-12284

第2図



第3図



538

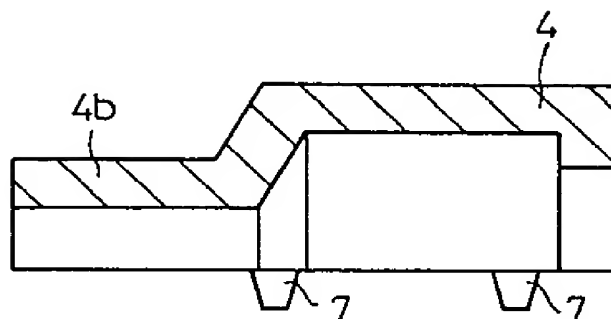
実開2-122844

実用新案登録出願人 戸田建設株式会社

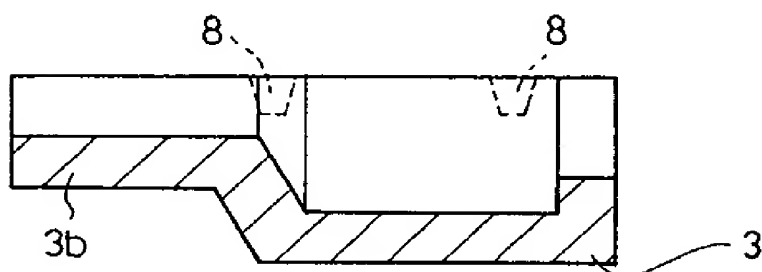
代理人 弁理士 佐々木 功

第4図

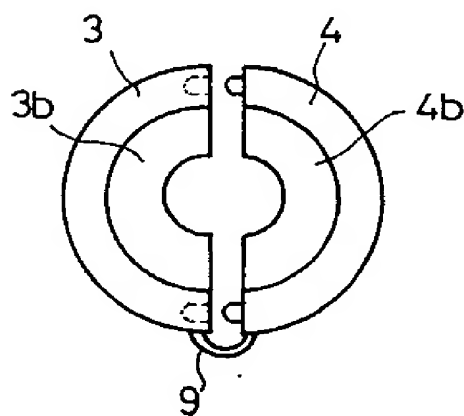
(イ)



(ロ)



第5図



539

実開2-122844

実用新案登録出願人 戸田建設株式会社

代理人 弁理士 佐々木 功